虫ぼし抄

# 関西大学図書館蔵「内藤湖南旅券」

## ― 湖南の欧州旅行 ―

藤　田　髙　夫

### はじめに

東洋史学の泰斗、内藤湖南（本名虎次郎、1866-1934年）については、ここで贅言を要するまでもあるまい。創設されたばかりの京都帝国大学東洋史学講座を、桑原隲蔵（1870-1931年）とともに主宰し、いわゆる京都学派の基礎を作り上げた学者である。1926年に退官した後の湖南が過ごした恭仁山荘（現京都府木津川市）が、関西大学によって修復・改築され、現在はセミナーハウスとして利用されていること、その書庫にあった書籍の大部分が関西大学図書館の内藤文庫として架蔵されていることなどは、周知のとおりである。

湖南はその生涯で幾たびも海外学術調査に出かけている。そのほとんどが、中国あるいは朝鮮半島における調査であるが、ただ一度だけ、ヨーロッパに赴いたことがある。2008年秋、本学図書館は、湖南の欧州旅行に際しての公用旅券を古書店より購入した。ここでその旅券の内容を簡単に紹介し、あわせて湖南の欧州旅行の足跡を振り返ってみたい。

### 湖南の公用旅券

旅券は縦26.2×横40cmで、六つ折りになって封筒に収められている。表面（図１）の右半は日本語で、上部に横書きで「日本帝国海外旅券」とあり、以下、縦書きで旅券番号「第五六〇〇八四号」、名義は「京都帝国大学教授　内藤虎次郎」と記され、「右ハ『官命ニ依リ佛國、英國、伊國、獨國及ビ米國ヘ』（以下余白）赴クニ付通路故障ナク旅行セシメ且必要ノ保護扶助ヲ與ヘラレン事ヲ其筋ノ諸官ニ希望ス　大正『十三』年『五』月『一』日　日本帝国外務大臣　正三位勲一等男爵　松井慶四郎」、最後に所持人自署として『内藤虎次郎』の署名がある。『　』内はインクによる書き込み部分である。ちなみに、現在の日本人が使用する旅券には、「日本国

TRANSLATION.
IMPERIAL JAPANESE GOVERNMENT
No 560084 PASSPORT.
Mr. Torajiro Naito,
Professor of the Kioto Imperial University.
The competent Authorities and all whom it may concern are requested to allow the above named person proceeding to France, the United Kingdom of Great Britain & Ireland, Italy, Germany and the United States of America by order of the Imperial Japanese Government, to pass freely and without hindrance and to give said person such protection and assistance as may be required.
The 1st day of the 5th month of the 13th year of Taisho (1924).
Baron Keishiro Matsui,
His Imperial Japanese Majesty's Minister of State for Foreign Affairs.
Signature of the Bearer: Torajiro Naito
TRADUCTION.
LE GOUVERNEMENT IMPÉRIAL DU JAPON
No 560084 PASSEPORT.
M. Torajiro Naito,
Professeur à l'Université Impériale de Kioto.
Les Autorités compétentes sont priées de laisser passer librement la personne ci-dessus mentionnée, allant en France, Royaume-Uni de Grande-Bretagne et d'Irlande, Italie, Allemagne et Etats-Unis d'Amérique par ordre du Gouvernement impérial du Japon, et de lui donner aide et protection en cas de besoin.
Le 1er jour du 5e mois de la 13e année de Taisho (1924).
Le Baron Keishiro Matsui,
Ministre des Affaires Etrangères de Sa Majesté l'Empereur du Japon.
Signature du porteur:
SUISSE
Official
（文譯）
任憑旅行無阻如有緊要事即請沿途各官加意照料善爲保佑
讀氏名
日本帝國外務大臣　正三位勲一等男爵　松井慶四郎
日本帝國外務大臣
第五六〇〇八四號
京都帝國大學教授
內藤虎次郎
公用
右ハ官命ニ依リ佛國、英國、獨國及米國ヘ（以下餘白）赴クニ付通路故障ナク旅行セシメ且必要ノ保護扶助ヲ與ヘラレン事ヲ其筋ノ諸官ニ希望ス
大正十三年五月一日
日本帝國外務大臣　正三位勲一等男爵　松井慶四郎
所持人自署
內藤虎次郎

図１

民である本旅券の所持人を通路支障なく旅行させ、かつ、同人に必要な保護扶助を与えられるよう、関係の諸官に要請する　日本国外務大臣」と記され、文面にはあまり変化がないことがおもしろい。旅券の左半には同様の内容が上は英文、下は仏文で記されており、右半には「公用」、左半には「Official」の朱印が押されている。

裏面（図２）には、湖南の写真が貼付され、イギリス・フランスの総領事発給の査証および各地での出入国記録などが全面に記されている。

日本帝国時代の旅券の実物に資料としての価値がどれほどあるのか、また著名人の旅券が出てくることがどれほど珍しいことなのか、専門家ではない身には判断がつかない。だが、この旅券に限っては、内藤湖南の欧州旅行に、得難い臨場感を与えてくれる貴重な資料であることは疑いない。

## 湖南の欧州旅行

内藤湖南の欧州旅行は、大正十三年（1924年）七月六日に神戸を出発し、翌十四年二月三日に帰国するまで、ほぼ七ヶ月に及ぶもので、学術視察を目的とする公用旅行であった。旅券の文面に記されているように、訪問国としてはフランス・イギリス・イタリア・ドイツの他にアメリカが挙げられているが、実際にはアメリカを訪れることはなかった。

出発当時、湖南は数え五十九歳で、前年三月には胆石を病んで胆嚢の摘出手術を受けている。この旅行中に湖南が家人・友人らに送った書簡29通が『内藤湖南全集』第十四巻に収められているが、そこに自らの体調についての言及があまり出てこないのは、健康を完全に取り戻していたということなのだろう。

旅行の詳細については、幸いなことに湖南自らの日記が遺されている。『内藤湖南全集』第六巻所収の「航欧日記」がそれである。その内容を、旅券裏面の出入国記録をつきあわせながら読んでいくと、同行した子息の内藤乾吉氏、教え子の石濱純太郎氏とともに、第三の同行者として湖南先生と旅をしているような気分になってくる。以下、欧州旅行の旅程を示しておこう。

大正十三年（1924年）
- 7月6日　京都発、神戸より出航
- 7月10日　上海着
- 7月16日　香港着
- 7月22日　シンガポール着
- 7月29日　コロンボ着
- 8月11日　スエズ着、汽車にてカイロへ
- 8月17日　マルセイユ着、汽車にてパリへ

図２

８月25日　パリ発、ドーヴァーを渡りロンドン着
９月29日　ロンドン発、パリへ
10月６日　パリ発、ベルリンへ
10月14日　ライプツィヒ着
10月16日　ミュンヘン着
10月19日　ウィーン着
10月23日　チューリヒ着
10月25日　パリ着
12月14日　パリ発、スイス経由でイタリアへ
12月15日　ミラノ着
12月16日　ヴェネツィア着
12月17日　フィレンツェ着
12月19日　ローマ着
12月20日　ナポリ着
12月21日　ローマに戻る
12月24日　ローマ発
12月25日　マルセイユ着
12月28日　マルセイユ発
大正十四年（1925年）
１月１日　ポートサイド着
１月13日　コロンボ着
１月19日　シンガポール着
１月25日　香港着
１月30日　上海着
２月３日　神戸着、その日のうちに京都へ

旅程から明らかなように、ロンドンには８月25日から９月29日までのほぼ一ヶ月、パリには10月25日から12月14日までの一ヶ月半と、長期にわたって滞在している。それに対してドイツ・イタリアは、ベルリンの一週間を除けば、駆け足で主要都市を回ったに過ぎない。つまり湖南の「学術視察」の主たる目的は、ロンドンとパリにおける資料調査だったのである。

ロンドンにおいては、ほとんど毎日のように大英博物館に通い、同博物館が所蔵するスタイン・コレクションを閲覧している。スタイン・コレクションとは、探検家Aurel Stein（1862-1943年）が行った中央アジア探検の将来物であり、その中心が、いわゆる敦煌文書である。現在、スタイン・コレクションは大英博物館から分かれた大英図書館が所蔵しているが、その閲覧には二週間前の閲覧申込が必要で、必ずしも許可されるとは限らない。湖南も簡単には見せてもらえなかったようで、スタイン・コレクションの責任者であったハーバート・ジャイルズ氏との直接交渉を経て、閲覧が可能となったようである。

パリにおいては、ビブリオテーク・ナショナルのペリオ文書が調査対象であった。Paul Pelliot（1878-1945年）が1908年に敦煌莫高窟から持ち帰った敦煌文書で、中国学を修めたペリオが自ら一件ずつ内容を吟味して選び出したものであるため、その質の高さで知られている。パリでは、湖南はペリオ自身の他、フランスの中国学の中心となるアンリ・マスペロとも面談している。

内藤湖南のヨーロッパ学術調査の結果は、帰国の翌年大正十五年に発表された「欧洲にて見たる東洋学資料」（『新生』１-１、『内藤湖南全集』第十二巻所収）として結実する。中国や朝鮮半島における学術調査でも、湖南は史料の発見に大きなウェイトを置いているのだが、ヨーロッパ旅行のおいては、それは敦煌文書の調査であった。当時の日本では、いわゆる「敦煌学」がすでに立ち上がっており、湖南はその創始にかかわる中心人物の一人であったから、図版や釈文が刊行されていない敦煌文書の実物を調査することは、なによりも優先される事項であったのだろう。

ただ、この旅行で湖南は多くの東洋学者と出会っているのだが、彼がヨーロッパの東洋学に対して、とりわけその水準に関して、どのような評価をしていたのか、はっきりと示すものはない。現に目の前にいる人に対する品定めは、避けたのかも知れないが、東洋史学の泰斗が同時代の他国の研究をどこまで評価したのか、是非知りたいところではある。

いずれにせよ、湖南の生涯におけるただ一度のヨーロッパ旅行は、円熟期にあった湖南によって大きな意味を持ったに違いなく、その七ヶ月間が凝縮しているのが、紹介した公用旅券なのである。

（ふじた　たかお　文学部教授）